

20世紀終わりの雑感

20世紀もあと僅か。今年は20世紀最後の年ということで、多彩な行事が世界各地で行われています。

私が趣味としている切手の世界では、千年紀（ミレニアム）を記念した切手が各国から数多く発行されています。わが国からは実に170種類の20世紀デザイン切手が発行されており、アメリカやイギリスでも負けず劣らずという状態です。沢山の美しい切手を眺めるのは大変楽しいことなのですが、それを洩れなく集めるのは懐具合に大きく影響し、頭の痛いところです。



さて、この20世紀は科学技術の進展が目覚しく、我田引水かもしれませんが、「20世紀は科学技術の時代であった。」といっても過言ではありません。科学技術のお陰で生活が豊かになり、そして地球は狭くなり、宇宙は小さくなりました。科学技術が、経済社会の発展と生活の向上に貢献したことは論を待ちません。

ところが、20世紀が将に終わろうとしているこの1～2年、科学技術に対する信頼を失墜させるような出来事が続出しました。「もんじゅ」のナトリウム流失、核燃料施設の臨界事故、H-2及びM-Vロケットの打ち上げ失敗、新幹線トンネルのコンクリート落下、そしてコンコルドの墜落。これら一連の事故についての原因は、それぞれ厳しく糾明されるべきですが、全体として先端技術システムに対する信頼性（システムに関わる人間性を含めて）を著しく低下したことは否めません。

私達、科学技術の仕事に携わるものは、この信頼性の維持向上のために不断の努力を傾注してきました。しかし、現在、今一度立ち止まってシステムの再検討をすべき時にあると思います。科学技術に対する信頼性を回復し、失敗のリスクを最小にする努力を再スタートさせねばなりません。ただ、懸命の努力にも拘わらず、リスクは決して0にはならないことも事実です。科学技術は、過ちを侵さない絶対者のものではなく、常に過ちを繰り返す人間のものである、ということを銘記しなければなりません。この事実を社会に対し謙虚に訴えることにより、21世紀における科学技術の復権と社会における受容が獲得されることとなるのではないのでしょうか。

評議員・雨村博光

(財)リモートセンシング技術センター・専務理事